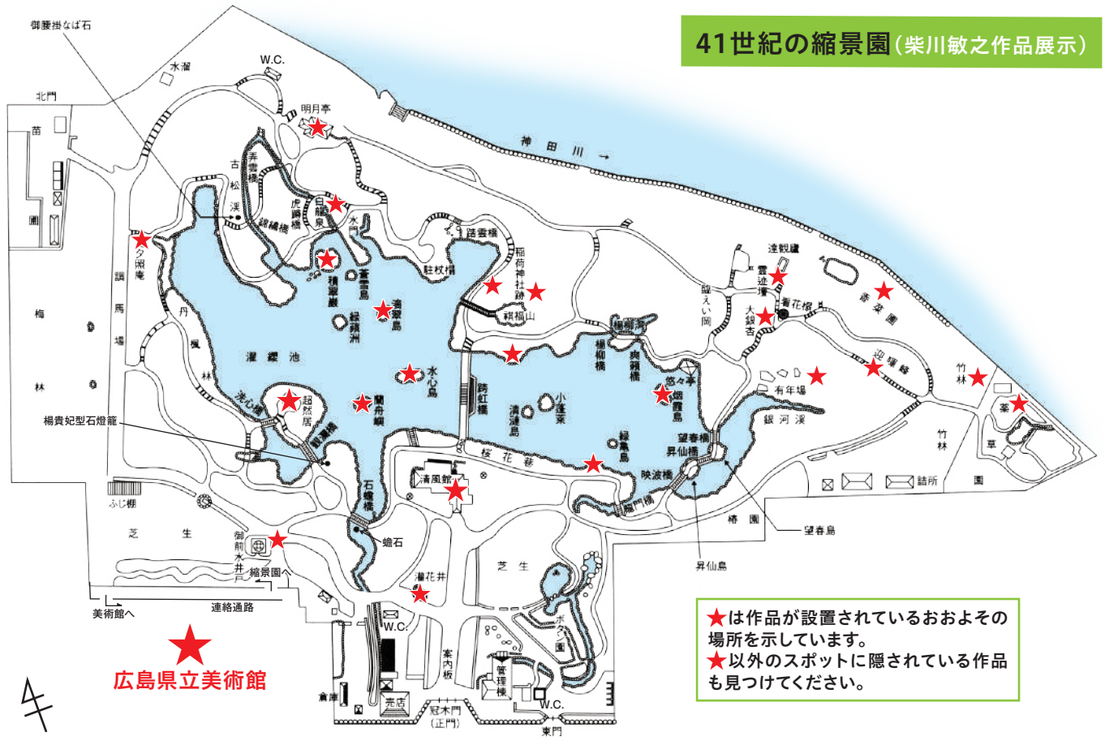
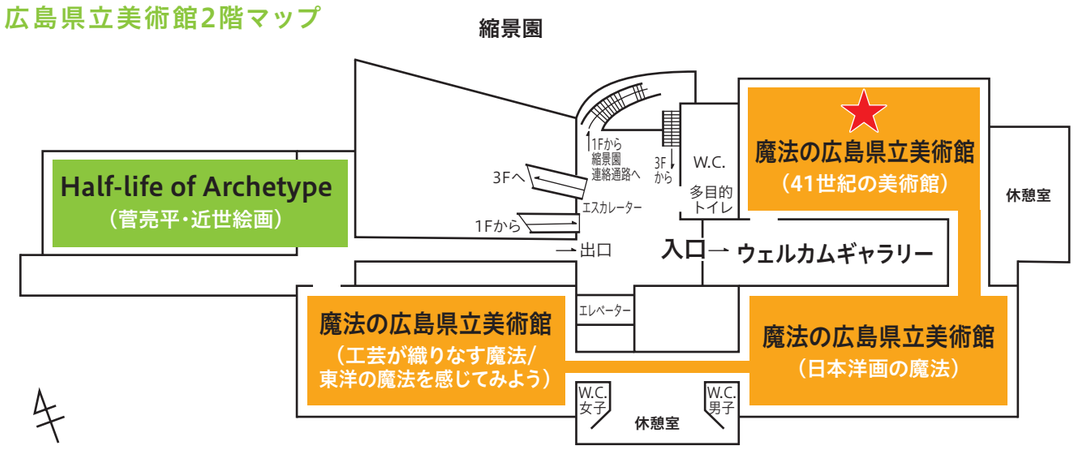
縮景園マップ



広島県立美術館2階マップ



広島県立美術館・縮景園連携展示
「（大名庭園＋美術館）×現代アート＝記憶の庭　菅亮平・柴川敏之とめぐる」

2023（令和５）年７月６日（木）－９月10日（日）
広島県立美術館２階（所蔵作品展第４室）・縮景園

2023（令和５）年７月６日発行
執筆・編集：広島県立美術館　山下寿水（P.1）、隅川明宏（P.2上段,3）、神内有理（P.2下段,5）
発行：広島県立美術館
印刷：インパルスコーポレーション

写真撮影：オーシマ・スタジオ有限会社

菅亮平《3D Model, Gateposts of the Kankokan》 2023年

柴川敏之《2000年後に発掘されたダリの木（ヴィーナスの夢）》 2023年

（大名庭園 ＋ 美術館）× 現代アート ＝ 記憶の庭

菅亮平・柴川敏之とめぐる

庭園で美術を見る？
美術館で庭を見る？

広島県立美術館 Hiroshima Prefectural Art Museum × 名勝 縮景園
広島県立美術館２階［所蔵作品展第４室］＋縮景園
https://www.hpam.jp/

「（大名庭園＋美術館）×現代アート＝記憶の庭」について

当館と、隣接する名勝「縮景園」は、それぞれ美術館と大名庭園という趣の異なる鑑賞空間ですが、本展ではこの両施設を一体的に繋げるため、築庭400年を超える縮景園の「歴史性」をひとつの切り口としながら、2人の現代アーティストの作品を展示します。

菅亮平は、戦前の縮景園に設立された国内最初期の私立美術館といわれる観古館や、園内の蔵に保管され、被爆による焼失を免れた能道具をテーマとした新作と、近世の美術作品を併置して、美術館と縮景園の接続を図ります。

柴川敏之は、身の周りにあるものを化石へと変容させることで「2000年後の縮景園」へと来園者を誘い、未来の名所を今日に浮かび上がらせます。また、所蔵作品展「魔法の広島県立美術館」では、当館を代表する作品、サルバドール・ダリ《ヴィーナスの夢》（1939年）等ともコラボし、当館のコレクションへの新たな視点を提示します。

美術館と庭園、過去・現代・未来とを現代アートを介して繋げようという本展。この夏は、池泉を中心とする回遊式庭園である縮景園とともに美術館も併せてめぐり、これまでになかった新たな鑑賞体験をお楽しみください。

縮景園と広島県立美術館　写真撮影: オーシマ・スタジオ

縮景園

縮景園は1620（元和6）年、浅野家の初代藩主長晟（1586-1632）が茶人で作庭家の広島藩家老上田宗箇（1563-1650）に命じて作らせたことを端緒とする大名庭園です。その初期には城下の四方を眺望できる高楼を中心とした開放的な庭園であったと考えられ、現在のような回遊性が高い庭園として整えられたのは七代藩主重晟（1743-1813）による大改修以降のことです。

浅野家歴代によって度重なる改修を受けた園内は変化に富み、深山幽谷の趣をも帯びて、実際以上の広大さを感じられる空間となっています。なかでも重晟による大改修では、巨大な池泉を二分する跨虹橋、その左右へ巧妙に配置された島々、池上に建つ涼やかな悠々亭、松と石組の卓越した積翠巌などが生み出され、今日みられる原風景が完成しました。1940（昭和15）年に浅野家から広島県に寄付された縮景園は、1945（昭和20）年8月6日、原子爆弾によって広島市街が焦土と化すなかで壊滅的な被害を受けましたが、1974（昭和49）年までに主だった施設の復旧を経て、かつてのように美しい風景を今日に伝えています。

広島県立美術館と縮景園

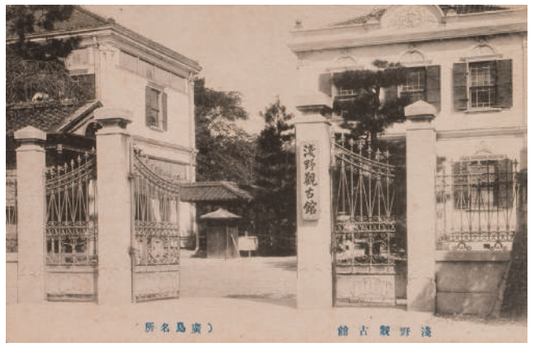
縮景園に隣接する広島県立美術館は、1968（昭和43）年、中国地方初の公立美術館として開館しました。その後、平成8（1996）年の全面リニューアルを経て、現在に至っています。

広島県立美術館が縮景園に隣接する場所に設置された理由の一つは、歴史と美術を合わせて「文化ゾーン」を形成できる点にありました。しかし、当館開館から遡ること55年前、この地にあった観古館という美術館の存在も、歴史的・文化的土壌を育んだと言えるかもしれません。

観古館は、1913（大正2）年、旧広島藩最後の藩主・浅野長勲（1842-1937）が、浅野家伝来の名宝を一般公開する目的で設立した日本最初期の私立美術館です。国宝・重要文化財クラスの作品を含む約300点が常時、展示され、県内外から多くの来館者を集めました。また開館にあわせて縮景園も一般公開されており、今に通じる文化ゾーンのイメージはこの時に作られたと言うことも出来るでしょう。しかし、1940（昭和15）年に、観古館（収蔵品を除く）と縮景園は広島県に寄付された後、1945（昭和20）年8月6日に原爆投下により焼失しました。

広島の歴史文化の開花、喪失の上に再生したのが、現代の広島県立美術館であり、縮景園なのです。

参考　1914（大正3）年頃の縮景園
（『絵はがき「廣島の泉邸」』より　個人蔵）



参考　1924（大正13）年頃の観古館
（『絵はがき「広島浅野泉邸」』より　広島市立中央図書館蔵）

菅亮平 Half-life of Archetype

菅亮平による「Half-life of Archetype」は、縮景園ゆかりの被爆能面と観古館を手がかりとする企画です。縮景園内にはかつて旧藩主浅野家が使用し、饒津神社に寄付した能面・能装束類が保管されていた時期がありました。被爆しながらも現存する一部は、広島城下における文化の断絶と継承を象徴するような文化財として、大切に受け継がれています。また園内の一角に設立された美術館「観古館」（1913-1940）も失われて久しく、しかし石造ゆえに姿を留めた門柱は本来あるべき居場所を失うも、かつての記憶を今に繋いでいます。このような歴史性に着想した菅は、戦前の広島で盛んに行われていた能の文化・美意識へも視界を広げました。《PineTrees》では、能舞台の鏡板に描かれるという「影向の松」の成り立ちを参照して作った無数の模型に、光を照らして現れる幻影を「松林図」として抽出し、物質や事象の変容していく時間軸に内在する祖型・理想を問いかけます。

被爆能面や観古館を手がかりとした菅が生み出す展示空間は、近世広島の作品とともに過去の喪失・不在への想像力を掻き立て、そして喪失した時間軸にそれらの本質を想起させることでしょう。

菅亮平

1983年愛媛県生まれ。広島市立大学講師。美術館やギャラリーの展示空間そのものを題材とした制作活動を行う。近年は「空虚（ヴォイド）」への思索を起点にして、想起の芸術の今日的な可能性を追求する。

菅亮平《Pine Trees / Study》（部分）　2023年　作家蔵

菅亮平《Candles - Death Do Us Part》　2023年　作家蔵
制作協力: 橋本健佑、舛本裕一、SEND Hiroshima　Photo: 橋本健佑

岡岷山ヵ《縮景園図》　1788-1800（天明8-寛政12）年頃　個人蔵

参考　縮景園にて被爆した能面（広島市指定重要文化財《小面 焼印 出目》饒津神社蔵）

菅亮平《Waiting for Deity - Yogo no Matsu at Kasuga Taisha》　2023年　作家蔵

狩野派《松図》　17-18世紀　旧広島藩士三好家伝来　個人蔵

岡岷山《山水四景図》　1789-1806（寛政元-文化3）年頃　個人蔵

柴川敏之 41世紀の縮景園｜PLANET GARDEN feat. MUSEUM

柴川敏之は、「2000年後に発掘された現代社会」をテーマに創作活動を行っている美術家です。身の回りにあるものを「化石」化することによって、「現代とは何か」を未来の視点から問いかけます。

今回の展示テーマは「41世紀の縮景園」。2000年後の未来で発掘されたとする「いま」の化石と、縮景園内のそれぞれの場所との関係性から新たな名所が立ち表れました。たとえば、祺福山（きふくざん）に置かれた招き猫の化石は、吉祥を願う名所として過去からの継続性を感じさせます。茶室・夕照庵（せきしょうあん）に置かれたカップ麺と歯ブラシの化石からは、理解を誤りながらも、茶の湯文化を引き継ぐ未来の姿が見えるようです。

一方で、松の枝に添えられたサルバドール・ダリの《ヴィーナスの夢》（1939年／当館蔵）から抜け出たような溶けた時計とキリンのオブジェの化石は、美術館と縮景園、非現実と現実の混在が、時空を超えた奇妙な名所を作り出しています。

このように、柴川作品は、縮景園を象徴する景物を、掘り下げ、拡げ、時にずらしながら、ありえるかもしれない未来の景色として提示することによって、私たちにダイナミックな時代の往還を体験させます。そして、それは失われた過去とともに、この場所の「いま」「ここ」をかけがえのないものとする営みとも言えるのです。

柴川敏之《 2000年後に発掘されたダリの木（ヴィーナスの夢）》
2023年　作家蔵

柴川敏之（しばかわとしゆき）

1966年大阪府生まれ。1991年広島大学大学院修了。就実短期大学教授。ポンペイ（イタリア）や草戸千軒町遺跡（広島県福山市）との出会いから、「2000年後に発掘された現代社会」をテーマに、制作活動を行う。

柴川敏之《2000年後に発掘された「招き猫」の化石》　2023年　作家蔵

柴川敏之《2000年後に発掘された「折り鶴」の化石》　2022年　作家蔵
Photo: 青地大輔

柴川敏之《2000年後に発掘された「鳥かご」の化石》
2023年　作家蔵